

Title	豊中キャンパスの等価交換について
Author(s)	三谷, 裕康
Citation	大阪大学史紀要. 4 P.67-P.69
Issue Date	1987-01-20
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/4209
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

豊中キャンパスの等価交換について

三 谷 裕 康

旧制の帝国大学系六大学（東京、京都、東北、九州、大阪、名古屋）、国立六医科大学（新潟、千葉、金沢、岡山、長崎・熊本）、工業大学及び神戸商科大学、以上一四の旧制国立大学には予科が設置されていなかったため、旧制高等学校を卒業してこれらの大学へ進学するのが原則であった。しかるに旧制高等学校の学年別総定員数は上記一四大学の学年別総定員数を遙かに下まわっていた。したがって旧制高校だけでは定員割れとなる学科及び大学では、旧制専門学校からの進学が可能であった。

旧制高校の数は、国立二五、公立五（殖民地二）、私立五、合計三五校であった。そのうち明治時代に開設されたのは八校であり、所謂ナンバースクールと称し、地名が校名に付されなかった。大正七年末（一九一八）に大学令が發布されてから、大学が急増したので、それに応じて大正八年から高等学校も増設され、所在地が校名に付されるようになった。

旧制高等学校の修業年限は三年を通則としたが、公立と私立の高校は七年制で、尋常科四年を含む一貫教育を特徴とした。国立では東京

高等学校が唯一の七年制高校であった。

昭和二四年度の学制改革にもなつて、旧制高等学校が新制大学に編入され、大学の文理学部、教養部または教養学部へ転換した。経過措置として、昭和二四年三月旧制高等学校一年修了者は新制大学へ進学、二年修了者は昭和二四年度の三年生として進級し、昭和二五年三月の卒業で、旧制高校の歴史が閉幕となったのである。

明治一九年（一八八六）帝国大学の発足にもなつて、東京に第一、大阪に第三高等学校が登場し、帝国大学への登竜門となった。翌二〇年には第二（仙台）、第四（金沢）、第五（熊本）高等学校が増設された。第一高等学校は、明治七年開設の東京英語学校から変遷したのである。第三高等学校は、明治二年開設の舎密局と洋学校を合併して明治四年に成立させた大坂開成所をその発祥とするのであるから、第一高等学校よりも古いことになる。

明治二二年八月に第三高等学校は大阪から京都へ移転した。明治二七年高等学校令の発布にもなつて、五つの高等中学校は高等学校と改称するようになり、昭和二五年（一九五〇）三月の終焉まで旧制高校五十六年の歴史が綴られるわけである。大正一〇年（一九二一）大阪高等学校が天王寺村で開設され、明治二二年以来失われていた最高学府への登竜門が三十二年ぶりに大阪に復活した。さらに七年制の府立浪速高等学校が大正一五年に待兼山で発足した。設置者は異なるけれども、大阪では、二つの旧制高等学校を擁して、昭和期を迎えるようになったのである。

終戦後の学制改革で、新制中学校は昭和二二年度から、新制高等学

校は二三年度、新制大学は二四年度から発足することになった。旧制中学校が新制高等学校へ転換するのは容易であったが、旧制高等学校及び専門学校並びに師範学校を新制大学に転換するのは必ずしも容易ではなかった。

学部如何に拘らず、総合大学で共通に必要なのは教養課程である。一般の新制大学では、師範学校から昇格した教育学部がこれを担当し、旧制高等学校から昇格した文理学部は必ずしも担当しなかったようである。しかるに旧帝大系の新制大学では、旧制高等学校から転換した教養部または教養学部が、これを担当したのである。

旧帝大系について述べると、北海道には旧制高等学校が存在せず、その代りに北大は予科を保有していたので、これが教養部に転換できた。東北大では二高、京大では三高、名大では八高、九大では福岡高がそれぞれ教養部を形成した。しかるに東大では、一高と東京高（七年制）の二校を母胎として教養学部が形成された。阪大も大高と浪高（七年制）をそれぞれ南校と北校とにして、教養部に充当した。

旧制二高校を教養課程に投入できたのは東大と阪大だけである。東大に合併された二高校は共に国立であるから、文部省だけで解決できたが、国立の大高は良いとしても、浪高は府立であるから、国立の阪大へ移管するには、国は浪高と等価交換しうる代償を府へ提供せねばならなかった。

当時大阪市が、旧制商科大学を土台にして、市立総合大学を成立させることが確実であっただけに、財政的に富裕な大阪府は、面子にかけても府立総合大学を成立させようとする機運にあった。しかるに

府の所管する高等教育機関は、浪高、女専、農専及び三工専（化学、機械、淀川）であり、女専は禁男の園に過ぎず、農専と三工専はそれぞれ農学校と工業学校に併設されていたので、キャンパスを提供するのは浪高だけであった。

浪高は丘陵地にあり、阪大への進学者も多く、また浪高自体が阪大への併合を希望していることを勘案して、当時の赤間文三知事は堺市百舌鳥にある国立大阪工業専門学校（昭和一四年開設）に白羽の矢を立て、浪高と交換することを提案した。

大工専は府に移管されることに抗し、単独で工業大学となるか、大阪市へ移管され市立総合大学に吸収されることを望んだ。しかるに国も市もこれを拒否したので、府の誠意ある説得により、遂に大工専は府への移管に同意せざるをえなくなったのである。これを契機として阪大の豊中キャンパス、府大の中百舌鳥キャンパスが成立する運びとなった。

旧制大阪大学は、北海道大学や名古屋大学と同じく、理科系のみの不完全総合大学であったが、三大学共に昭和二十三年度の後期から文科系学部が増設されるようになった。阪大では、国と府との了解に基づいて、取りあえず、半分が空家となっていた浪高尋常科教室に法文学部を発足させ、十一月から開講した。

昭和二四年度の新制大学発足にもなつて、浪高は北校として阪大教養部一学年を受け入れることになり、まだ土地及び建物が移管されないままに、旧制浪高生一学年、旧制阪大法学部一年生及び新制阪大教養部一学年が浪高で同居する結果となった。勿論南校でも旧制大

高三年生と新制阪大教養部一年生の一部が同居していたのである。

昭和二四年度末で、旧制浪高三年生は、その浪速の名と共に、待兼山から消え去る運命にあった。しかるに新制府立総合大学にその名が継承され、中百舌鳥に府立浪速大学が誕生するに至った。しかし旧制大工専の二年及び三年生がなお在籍していたので、全員が中百舌鳥から姿を消すのは、昭和二六年三月末となる。それまで二年間も移管は行われなかつたのであるから、府立浪速大学の学生が国立工専に間借りをし、国立大阪大学の学生が府立浪高で居候をするという変則な運営が二年間も続いたわけである。晴れて豊中キャンパスが国有に、中百舌鳥キャンパスが府に帰属したのは、昭和二六年度からである。

昭和二六年二月二八日提出の大阪府会議案「元府立浪速高等学校と国立大阪工業専門学校並びに国立青年師範学校との土地建物標本機械器具等交換の件」によれば、等価交換の金額は約一一、四六六万円であった。そのうち阪大へ移管された浪高の土地が約二六、八〇〇坪（約八、四〇〇万円）、建物は約四千坪（約一一、二〇〇万円）、その他は少額であった。府大へ移管された大工専の土地が約四万坪（約八、二〇〇万円）、建物は約七、三〇〇坪（約八、八六〇万円）、その他が一一、六五〇万円となっている。

等価交換とはいえ、当時の評価では、土地が安く、建物が高かつた。その後土地が暴騰したので、赤間知事は府立浪速大学の開設に有利な取引をしたと考える。その二〇年前に柴田善三郎知事が大阪帝国大学創設のため府立大阪医大を無償で国家に提供し、仕度金まで付けたことを考慮すれば、若干の不利はあっても、現在の豊中キャンパスにお

ける発展が、取引の不利を帳消しにしたといえよう。

（みたに ひろやす
大阪大学名誉教授
高知工業高等専門学校校長）

大阪大学五十年史通史 正誤表

- | | |
|----------------|---------------------------------|
| p. 253 下から10行目 | ては部既設の工学があるため
→ては既設の工学部があるため |
| p. 263 上から11行目 | 4233万余円→40233万余円 |
- なお、末尾執筆者の欄に井上薫氏、資料提供者の欄に吉川要三郎氏のお名前がもれておりましたのでお詫びして訂正いたします。